

白馬だより

鈴木均（泉州労山・大町労山）

家の周りは何の音もしない。雪がしんしんと降っている。ときどき屋根雪がドドーンと大きな音を立てて落ちる。ドカーンと地震ではないかと思うほどの轟音の時もある。山陰など、日本海側を初め全国的に大雪だと言うが、白馬村はクリスマスから年の初めまでは寡雪で悩み、宿はキャンセルもあったというが（役場は昨年につき寡雪対策本部を設置した）、1月中旬からはほとんど毎日が雪の日だ。かんたんに「大雪警報」を出してくれるなど言いたいが、実際何十時間も降り続けることもある。除雪してもまた降る。しかし、できるだけ新雪のうちに除雪しないと次第に硬くなり、放置すれば氷化してしまう。都会人からすれば、なんと非生産的活動かと笑われそうだが、ほっておくことはできない。バイトに出る前に早起きするか、帰宅後1時間以上かけてでも除雪せざるを得ない。

山仲間からは、「そんなにたいへんでも鈴木さんは白馬が好きなんだね」と言われる。 ”住めば都”か？一昨年家で大町労山の新年会をやったら、「白馬に入ってから大雪で道路が見えず、怖くなって引き返した」とか、「怖くて夜、白馬には行けない」と言われた。

1月中旬からの大雪はひどかった。朝起きると玄関の車は形のまますっぽり雪に覆られていた。水分の多いベタ雪で、除雪機で飛ばしても内部にくっついてオーガという雪を削って飛ばす回転刃やシューターがすぐに詰まってしまう。そのたびに園芸用のスコップや木の棒で雪を削り落とす。5リットルのガソリンタンクはすぐ無くなってしまい、いつまた大雪になるかわからないから常に予備をおいておく。

今シーズンに入って、スキーや登山ではなく、屋根雪に埋もれたり、除雪機の下敷きになったりなど、生活上の雪関係で県下で5名が亡くなった。多くは高齢者である。

山での遭難もおこっているが、近年最も多いのが外国人を中心にしたBC（バックカントリー）での遭難騒ぎだ。パウダーを楽しむのはいい（日本の雪は外国では味わえないらしい）のだが、意図的にスキー場からコースアウトして、行方不明になって救助を依頼する。先日、遭難したオーストラリア人家族が野沢の山中からシンガポールの友人に国際電話で救助要請し、救助隊が出たというのは理解に苦しむところだ。

2月初めに唐松岳単独での遭難（未だに発見されていない）、赤岳や阿弥陀南稜での滑落など、事故も起きている。自分は、この豪雪で2回の山行を中止せざるを得なかったが、山で命を失いたくないものだ。山をよく知らない人から、「山で死ねたら本望やろ」と半分冗談交りに言われることもあるが、ヤマヤは「山では絶対に死にたくない」と誰もが思っている。

早く春が来てほしい。厳しい雪山もいいが、残雪に輝く春の雪山が一番好きだ。 2017/2/11 記

デッキのすぐそばまで押し寄せた屋根雪（高さ約1.5m）

